慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	泉南綿織物業と谷口房蔵 : 吉見紡織株式会社を事例に
Sub Title	Sennan cotton textile industry and Fusazo Taniguchi : the case of Yoshimi-boshoku Co. Ltd.
Author	橋口, 勝利(Hashiguchi, Katsutoshi)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2020
Jtitle	三田学会雑誌 (Mita journal of economics). Vol.113, No.3 (2020. 10) ,p.371 (79)- 397 (105)
JaLC DOI	10.14991/001.20201001-0079
Abstract	本稿の課題は，近代日本の綿織物産地の形成過程を解明することである。 谷口房蔵は，地域の有力な資産家の出資を集めて，郷土の泉南産地に，大規模な紡織兼営織布の吉見紡織株式会社を設立した。このことで，田尻町の財政を好転させ，インフラ整備に貢献した。吉見紡織は，昭和恐慌や労働争議などを迎えた際には，織布部門の縮小とハイドラフト化を推し進めて競争力を強化した。そして原料綿糸を産地機業家へ供給した。この結果，産地の競争力を高めて，成長へとつながっていったのである。 The goal of this paper is to analyze modern Japan's cotton textile industry. Fusazo Taniguchi received investment from some wealthy local individuals and established Yoshimi-Boshoku Co.Ltd in the Sennan area. It improved the public finances of Tajiri town and its infrastructure rapidly developed. During The Showa Depression, Yoshimi-Boshoku had to face labor trouble, so they reduced their woven fabric department and promoted high draft fabric instead. The Company also supplied raw cotton thread to other textile manufactures. In this way, the Sennan area became the main production center of cotton textile in Japan.
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20201001-0079

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」113 巻 3 号（2020 年 10 月）

泉南綿織物業と谷口房蔵
——吉見紡織株式会社を事例に——

橋口勝利 *

Sennan Cotton Textile Industry and Fusazo Taniguchi: The Case of Yoshimi-Boshoku Co.Ltd.

Katsutoshi Hashiguchi *

Abstract: The goal of this paper is to analyze modern Japan's cotton textile industry. Fusazo Taniguchi received investment from some wealthy local individuals and established Yoshimi-Boshoku Co.Ltd in the Sennan area. It improved the public finances of Tajiri town and its infrastructure rapidly developed. During The Showa Depression, Yoshimi-Boshoku had to face labor trouble, so they reduced their woven fabric department and promoted high draft fabric instead. The Company also supplied raw cotton thread to other textile manufactures. In this way, the Sennan area became the main production center of cotton textile in Japan.

Key words: Cotton textile industry, high draft, labor trouble

JEL Classifications: N60, N30

* 慶應義塾大学経済学部
Faculty of Economics, Keio University

1　はじめに

本稿の課題は，近代日本の綿織物産地の形成過程を解明することである。近代日本の綿業の発展過程において，産地綿織物業の重要性は研究史で指摘されてきた。なかでも，両大戦間期にいち早く力織機を導入して，輸出市場を基盤に発展した泉南，知多，遠州そして播州は代表的な綿織物産地であった[(1)]。その産地発展を牽引した要因として，地域商人の活躍があった。知多産地では，地域商人が市場（輸出市場と国内市場）を選択した上で，それに適合した生産組織を編成した。それゆえ，多様な品種や規模を有する機業家が産地に生まれ成長することになった[(2)]。

本稿で対象とする泉南産地は，知多産地と同じように，規模の異なる織布機業家が生まれ，製品も多様に展開していた。加えて，大規模な紡績資本や紡織兼営資本が併存する産地でもあった。綿工業の地域形成を論じるためには，この多様な主体を組み込むことが必要だと考えられる。そこで，泉南地域の綿業を対象に，産地形成とその発展像を具体的に検討していくことが本稿の課題である。

泉南産地は，阿部が主張するように，帯谷織布株式会社に代表される産地大経営の活躍がいくつもみられた。その一方で，小規模な機業家が多数生まれて産地を形成したことも指摘されている[(3)]。加えて重要なのは，泉南産地には，大都市の有力紡績資本に匹敵する企業が生まれていたことである。阿部武司は，綿糸価格の異常な上昇に対応するために，自ら紡績工場を設けて兼営織布へと上昇転化する機業家が，泉南や和歌山で生まれたことを指摘している[(4)]。しかしながら，泉南地域で屈指の規模を誇った岸和田紡績株式会社（以下，岸和田紡績）と吉見紡織株式会社（以下，吉見紡織）は，創業時から大規模な紡織兼営織布として存在していた。この大規模資本の経営の実態と産地との関係については，具体的に明らかになっていない。そこで本稿では，大規模な紡織兼営織布に注目して，地域のなかで紡織兼営を選択する理由と産地形成への貢献の側面に焦点をあてていきたい。本稿の課題の解明にあたっては，日本綿業の功労者，谷口房蔵に注目する。対象とする企業は，大正期に泉南地域に紡織兼営企業として創業した吉見紡織である。吉見紡織は，大阪合同紡績株式会社（以下，大阪合同紡績）の谷口房蔵が経営者として関与していた。谷口房蔵は，大紡績会社の大阪合同紡績の経営者であっただけでなく，大日本紡績連合会（以下，紡連）の操業短縮問題の意思決定でも強い影響力を発揮して，日本綿業界の発展に大きく貢献した人物であった。谷口房蔵は，大阪府日根郡田尻村の生まれであったことから，泉南地域の綿業振興にも影響力を発揮した。和泉紡績株式会社（以下，和泉紡績）の設立に尽力しただけでなく，出身地の田尻村には地域の有力農家・

---

(1)　阿部武司『日本における産地綿織物業の展開』東京大学出版会，1989 年。
(2)　橋口勝利『近代日本の地域工業化と下請制』京都大学学術出版会，2017 年。
(3)　阿部武司『近代大阪経済史』大阪大学出版会，2006 年，197–204 頁。
(4)　阿部武司・平野恭平『繊維産業』日本経営史研究所，2013 年，65 頁。

今井伊太郎との人的関係を基盤に吉見紡織を創業し経営者となった。吉見紡織は，地域の基盤を強みとして，1920 年代に紡連が主導した操業短縮，続いて昭和恐慌の影響を受けつつも，樽井紡績を合併するなど，地域の有力な綿業資本として急激に成長していく。したがって本稿は，吉見紡織の経営分析を，谷口房蔵や今井伊太郎，地域資産家とのつながりにも着目しつつ検討していく。なお，利用資料は，『泉南紀要』と各社の『営業報告書』，当時の新聞である。

2　泉南産地と谷口房蔵——産地の工業化と吉見紡織

(1)　泉南産地の主力製品

本節では，泉南産地の特徴を検討する。まずは，主力製品を 1917 年と 1926 年とで比較する。表 1 は 1917 年における泉南産地の主力製品をランキング化したものである。これによれば「白木綿・綿布」は 77 件の工場が存在し，生産額が約 6,508 万円，シェアは約 77.7%に達している。「白木綿・広幅」と「白木綿・小幅」を加えれば，約 80%に達することから，白木綿が泉南産地の主力製品であることは間違いない。綿糸は 6 件の工場で約 504 万円の生産額を示す。ネルやタオル，紋羽については生産額は低いものの件数が 10 件を超えていることから中小規模の工場が多く分布していたと考えられる。

1926 年の主要製品を示した表 2 をみると，「広幅綿布」の工場は 127 件に達して生産額が約 5,349 万円でシェア約 45%となっており，輸出向け産地への傾向を強めたことがわかる。さらに，綿糸生産額は，約 2,756 万円でそのシェアは約 23.2%に上昇しており，綿糸部門の成長もみて取れる。工場の件数をみると，タオルは 66 件，ネル生地は 17 件，モスリン友禅は 7 件，紋羽は 25 件，敷布は 23 件，別珍は 18 件，毛布は 23 件と小規模な工場が多く生まれ，産地の多様性はいっそう増していった。

(2)　泉南産地の主力企業——寺田甚与茂系と谷口房蔵系

泉南産地の機業家の特徴について検討する。表 3 は，泉南産地の主要な機業家を，1917 年と 1926 年とで職工数に応じてランキング化して比較したものである。これによれば，産地の上位層は，①織布専業の工場と②紡績会社系の兼営織布工場に分かれる。①では，泉州織物株式会社や佐野織物株式会社，中林綿布合資会社など比較的大規模な機業家が存在していた。一方，②の紡績会社系の兼営織布は，1894（明治 27）年の創立で寺田甚与茂が経営する岸和田紡績が職工数 1,000 人を超える規模を有し，泉南産地の成長を牽引する位置にあった。加えて，和泉紡績株式会社（以下，和泉紡績）は，泉南地域の紡績業の独占的地位にあった岸和田紡績に対抗すべく，1912 年に設立された。岸和田の資産家の宇野亮一は，紡績企業を設立するために，白井治平（春木村）や山本藤兵衛（佐野村），中辰之助（熊取村），浜口亀太郎（岸和田），戎野喜太郎（樽井村）などの泉州地域の資産家を結

表 1　泉南産地の主要製品（1917 年）

順位	主要製品	工場数（件）（A）	生産額（円）（B）	シェア（%）	B/A
1	白木綿・綿布	77	65,079,288	77.67	845,186
2	綿糸	6	5,037,827	6.01	839,638
3	綿紡織	1	3,781,367	4.51	3,781,367
4	メリヤス	3	3,071,706	3.67	1,023,902
5	ネル	14	2,546,464	3.04	181,890
6	タオル	56	1,464,683	1.75	26,155
7	白木綿・広幅	7	1,246,419	1.49	178,060
8	白木綿・小幅	5	636,460	0.76	127,292
9	石綿	2	284,000	0.34	142,000
10	綾木綿	1	181,600	0.22	181,600
11	紋羽	10	170,188	0.20	17,019
12	敷布	8	82,135	0.10	10,267
13	撚糸	1	51,000	0.06	51,000
14	製綿	1	37,400	0.04	37,400
15	毛布	7	25,295	0.03	3,614
16	セル	1	21,600	0.03	21,600
17	女学校生袴地	1	21,560	0.03	21,560
18	起毛	3	11,300	0.01	3,767
19	シャットル	2	10,400	0.01	5,200
20	紡績機付属	1	9,457	0.01	9,457
21	牛毛製糸	3	7,080	0.01	2,360
22	不明	2	2,420	0.00	1,210
23	刺繍	1	2,100	0.00	2,100
24	パッキング	1	1,800	0.00	1,800
25	木具	1	1,688	0.00	1,688
26	押綿	2	1,310	0.00	655
27	毛糸	1	900	0.00	900
総計		218	83,787,447	100.00	384,346

注 1）生産額に応じて上位からランキングした。
注 2）1 つの工場が「主要製品」を 2 つ以上扱っている場合，それぞれ 1 件として表記した。
そのため，工場数は実際の工場数と一致しない。
注 3）「シェア」は，生産高を総計で割って 100 をかけた数値。小数第 3 位を四捨五入。
注 4）「B/A」は，小数第 1 位を四捨五入。
注 5）「紋タオル」の 3 件については，金額の記載がなかったため，金額は反映していない。
注 6）「ネル生地白木綿」は 3 件あった。「ネル生地」と「白木綿」とで分類し，金額は 2 で割った。
資料）『泉南紀要』泉南郡役所，1917 年版。

表 2　泉南産地の主要製品（1926 年）

順位	主要製品	工場数（件）（A）	生産額（円）（B）	シェア（%）	B/A
1	広幅綿布	127	53,491,408	44.96	421,192
2	綿糸	8	27,561,258	23.17	3,445,157
3	小幅白木綿	59	11,937,038	10.03	202,323
4	白木綿・綿布	16	8,653,365	7.27	540,835
5	タオル	66	4,032,272	3.39	61,095
6	朱子	1	2,688,085	2.26	2,688,085
7	ネル生地	17	2,312,142	1.94	136,008
8	モスリン友禅	7	1,907,972	1.60	272,567
9	綿帆布	1	1,535,452	1.29	1,535,452
10	紋羽	25	1,093,096	0.92	43,724
11	綾木綿	4	676,385	0.57	169,096
12	黄麻布	1	522,616	0.44	522,616
13	製綿	1	500,000	0.42	500,000
14	敷布	23	421,261	0.35	18,316
15	黄麻糸	1	415,413	0.35	415,413
16	別珍	18	309,926	0.26	17,218
17	毛布	23	214,307	0.18	9,318
18	綿糸晒	5	110,915	0.09	22,183
19	混綿糸	1	77,976	0.07	77,976
20	紋羽起毛	3	71,300	0.06	23,767
21	石綿	1	69,250	0.06	69,250
22	キャラコ地	1	67,171	0.06	67,171
23	綿糸染色	2	55,007	0.05	27,504
24	組紐	1	48,000	0.04	48,000
25	タオル晒	2	35,550	0.03	17,775
26	晒糸，染糸	1	33,069	0.03	33,069
27	オランダ生地	1	31,290	0.03	31,290
28	綿糸布	1	31,120	0.03	31,120
29	ガーゼ	3	21,566	0.02	7,189
30	履布	3	18,570	0.02	6,190
31	牛毛糸	1	14,040	0.01	14,040
32	綿布加工	1	10,800	0.01	10,800
33	メリヤス	1	3,501	0.00	3,501
34	首巻生地	1	902	0.00	902
総計		427	118,972,023	100.00	278,623

注 1）生産額に応じて上位からランキングした。
注 2）1 つの工場が「主要製品」を 2 つ以上扱っている場合，それぞれ 1 件として表記した。
そのため，工場数は実際の工場数と一致しない。
注 3）「シェア」は，生産高を総計で割って 100 をかけた数値。小数第 3 位を四捨五入。
注 4）「B/A」は，小数第 1 位を四捨五入。
注 5）「小尺布：小巾白木綿」は 1 件あった。「小尺布」と「小巾白木綿」とで分類し，金額は 2 で割った。
注 6）「綿糸布晒白」は，「綿糸布」と「晒白」とで分類し，金額は 2 で割った。
資料）『泉南紀要』泉南郡役所，1926 年版。

表 3　泉南機業家ランキングの推移

順位	1917 年							
	工場名		所在地	主要製品	生産高	職工（人）		
					（円）	男	女	合計
1	岸和田紡績株式会社	青木分工場	北掃守村	綿糸綿布	3,781,367	545	1738	2,283
2	岸和田紡績株式会社		岸和田町	綿糸	960	493	1568	2,061
3	岸和田紡績株式会社	野村分工場	岸和田町	綿糸	3,991,453	319	1022	1,341
4	和泉紡績株式会社		北掃守村	綿糸紡績	112,162	265	797	1,062
5	泉州織物株式会社	本社工場	岸和田町	綿布製造	1,959,326	146	682	828
6	株式会社　寺田紡績工廠		麻生郷村	布糸紡績	924,652	122	363	485
7	港織物株式会社		北中通村	粗布・綿ネル生地	455,955	54	344	398
8	大阪タオル合資会社		佐野町	綾木綿金巾	677,827	47	319	366
9	谷口綿布株式会社	吉見工場	田尻村	綿布	51,296,702	33	229	262
10	港織物株式会社	鶴原分工場	北中通村	綿ネル生地	513,913	35	204	239
11	柿花織布工場		北信達村	白木綿	3,775,335	34	190	224
12	佐野織物株式会社		佐野町	白木綿	209,746	27	171	198
13	川﨑合名会社		岸和田町	綿織物	266,218	38	160	198
14	岸村織布工場		岸和田町	白木綿	309,800	44	145	189
15	貝塚織物株式会社	麻生郷中支店	麻生郷村	白木綿	434,428	19	165	184
16	和泉綿布株式会社		岸和田町	生ネル地	228,990	17	166	183
17	和泉綿布株式会社工場		北中通村	綿ネル生地	514,300	22	161	183
18	貝塚織物株式会社	近義支店	北近義村	白木綿	57,750	24	154	178
19	泉尾織物会社工場		南掃守村	白木綿	298,650	7	150	157
20	泉州織物株式会社	分工場	長瀧村	綿布	540,312	25	132	157
上位 20 件　小計					70,349,846	2,316	8,860	11,176
199 件　合計					83,787,447	3,156	14,192	17,348

注）職工数の合計を基準に上位 20 位までランキングした。
資料）『泉南紀要』泉南郡役所，1917 年および 1926 年版。

集した。そして紡績企業経営の指導を受けるべく，谷口房蔵を呼び寄せたのである。[5] この結果，谷口房蔵は，泉南地域の資産家と連携して和泉紡績の設立・経営に関与し，吉見紡織も加えて寺田系紡績資本との双璧を形成した。[6] つまり，泉南産地は，〈寺田系紡績の 1 強時代〉から，〈寺田系と谷口系の並立〉の様相へと変化した。この 2 資本を中核に位置するなかで，織布専業の産地大経営と中小規模機業家が各地に生まれ，産地全体の成長へとつながっていったのである。

(3)　谷口房蔵と泉南綿業

吉見紡織は，谷口綿布工場がその前身であった。そもそも，谷口房蔵が谷口綿布工場を設立した要因は，郷里の吉見地域の振興を企図したからであった。当時の田尻村は，農業や漁業を主業としていたものの，農家の婦女子にとっては副業を行う適当な就業機会がなかった。そのため，谷口房

(5)　中沢米太郎『泉州産業史』岸和田市藤井町，1963 年，252–257 頁。
(6)　中沢米太郎『泉州産業史』岸和田市藤井町，1963 年，189–194 頁。

1926 年							
工場名		所在地	主要製品	生産高（円）	職工（人）		
					男	女	合計
和泉紡績株式会社		北掃守村	綿糸・大巾綿布	12,303,370	641	2,309	2,950
岸和田紡績株式会社	春木工場	北掃守村	綿糸・大巾綿布	3,116,542	471	2,351	2,822
吉見紡織株式会社		田尻村	綿糸	3,571,474	368	1524	1,892
吉見紡織株式会社	樽井支店	樽井村	大巾綿布	2,871,327	238	791	1,029
大阪紡績株式会社		西信達村	綿糸・ネル生地	2,219,400	190	820	1,010
株式会社寺田紡織工廠		麻生郷村	綿糸	3,251,900	182	721	903
佐野紡績株式会社		佐野町	綿糸	2,947,363	158	531	689
株式会社帯谷商店	福田工場	麻生郷村	朱子	2,688,085	85	460	545
和泉織布株式会社	本社工場	北中通村	広巾綿布	2,589,604	95	410	505
合資会社信達織布工場		北信達村	大巾綿布	1,707,334	78	311	389
泉陽紡織株式会社		北中通村	広巾綿布	1,866,007	80	308	388
和泉織物株式会社	紡績工場	南近義村	綿糸	1,363,527	81	258	339
貝塚紡織株式会社	紡績工場	貝塚町	綿糸	1,904,224	78	248	326
東洋麻糸紡績株式会社		麻生郷村	黄麻糸・黄麻布	415,413	135	176	311
熊取織物株式会社	王子分工場	南近義村	広巾綿布	1,396,342	50	250	300
岸和田煉瓦綿業株式会社	磯上織布工場	北掃守村	白木綿・別珍	2,043,350	64	231	295
東洋帆布株式会社		北掃守村	綿帆布・細綾綿布	1,535,452	46	203	249
中山織布	大町工場	八木村	小巾白木綿・大巾綿布	978,402	34	210	244
前川織布株式会社		佐野町	大巾綿布	1,709,822	66	149	215
中林綿布合資会社	紺屋工場	熊取村	広巾綿布	1,441,977	34	173	207
上位 20 件　小計				51,920,915	3,174	12,434	15,608
372 件　合計				119,548,231	5,260	22,105	27,365

蔵は，織布工場を設立することで，雇用機会を創出した。谷口房蔵は，まず，1907（明治 40）年に谷口綿布工場を個人所有で設立した。1914（大正 3）年には，谷口綿布株式会社に組織再編し，資本金を 50 万円とした。表 3 では，1917 年に 9 位にランキングする有力企業であった。そして 1918（大正 7）年に，資本金 200 万円の吉見紡織株式会社と改称することで，紡織兼営の大工場を確立するに至った。吉見紡織に改称してからは，田尻村内の婦女子は競って吉見紡織への就業を希望したため，就職難は解消に向かったという[(7)]。事実，表 3 によれば，1926 年の吉見紡織は，男工 368 人と女工 1,524 人で合わせて 1,892 人に達し，岸和田紡績に次ぐ 3 位の規模に達していた[(8)]。

谷口綿布の設立や吉見紡織への改称の動きには，田尻村資産家の今井伊太郎と城野伊三郎との人的関係も生かされた。今井伊太郎は田尻村の有力資産家で，田尻町振興を企図して谷口綿布の誘致

(7)　『谷口房蔵翁傳』谷口房蔵翁傳編纂委員会，1931 年，460–461 頁。

(8)　『吉見紡織株式會社 工場現況』では，1923 年度の従業員は，技術及び事務が 62 人，男工が 550 人，女工が 1,700 人に達していたと記録している。

表 4　吉見紡織の役員の変遷

年	期	取締役社長	専務取締役	常務取締役		取締役				監査役		
1919	上半期	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
	下半期	谷口房蔵				土岐榮太郎	宮川之雄	池田馬之助		三谷軌秀	今井伊太郎	
1920	上半期	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
	下半期	谷口房蔵				土岐榮太郎	宮川之雄			三谷軌秀	今井伊太郎	
1921	上半期	谷口房蔵				土岐榮太郎	宮川之雄			三谷軌秀	今井伊太郎	
	下半期	谷口房蔵	土岐榮太郎	城野伊三郎	宮川之雄			戎野喜太郎		城野久次郎	今井伊太郎	森井茂吉
1922	上半期	谷口房蔵	土岐榮太郎	城野伊三郎	宮川之雄			戎野喜太郎		城野久次郎	今井伊太郎	森井茂吉
	下半期	谷口房蔵	土岐榮太郎	城野伊三郎	宮川之雄			戎野喜太郎		城野久次郎	今井伊太郎	森井茂吉
1923	上半期	谷口房蔵	土岐榮太郎	城野伊三郎	宮川之雄			戎野喜太郎		城野久次郎	今井伊太郎	森井茂吉
	下半期	谷口房蔵	土岐榮太郎	城野伊三郎	宮川之雄			戎野喜太郎		城野久次郎	今井伊太郎	森井茂吉
1924	上半期	谷口房蔵	土岐榮太郎	城野伊三郎	宮川之雄			戎野喜太郎		城野久次郎	今井伊太郎	森井茂吉
	下半期	谷口房蔵	土岐榮太郎	城野伊三郎	宮川之雄			戎野喜太郎		城野久次郎	今井伊太郎	森井浅治郎
1925	上半期	谷口房蔵	土岐榮太郎	城野伊三郎	宮川之雄			戎野喜太郎		城野久次郎	今井伊太郎	森井浅治郎
	下半期	谷口房蔵	土岐榮太郎	城野伊三郎	宮川之雄			戎野喜太郎		城野久次郎	今井伊太郎	森井浅治郎
1926	上半期	谷口房蔵	土岐榮太郎	城野伊三郎	宮川之雄			戎野喜太郎		城野久次郎	今井伊太郎	森井浅治郎
	下半期	谷口房蔵	土岐榮太郎	城野伊三郎	宮川之雄			戎野喜太郎		城野久次郎	今井伊太郎	森井浅治郎
1927	上半期	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
	下半期	谷口房蔵	土岐榮太郎	城野伊三郎	宮川之雄			戎野喜太郎		城野久次郎	今井伊太郎	森井浅治郎
1928	上半期	谷口房蔵	土岐榮太郎	城野伊三郎	宮川之雄			戎野喜太郎		城野久次郎	今井伊太郎	森井浅治郎
	下半期	谷口房蔵	土岐榮太郎	城野伊三郎	宮川之雄			戎野喜太郎		城野久次郎	今井伊太郎	森井浅治郎
1929	上半期		土岐榮太郎	城野伊三郎	宮川之雄			戎野喜太郎		城野久次郎	今井伊太郎	森井浅治郎
	下半期		土岐榮太郎	城野伊三郎	宮川之雄			戎野喜太郎	谷口豊三郎	城野久次郎	今井伊太郎	森井浅治郎
1930	上半期		土岐榮太郎	城野伊三郎	宮川之雄			戎野喜太郎	谷口豊三郎	城野久次郎	今井伊太郎	森井浅治郎
	下半期		土岐榮太郎	城野伊三郎			宮川之雄	戎野喜太郎	谷口豊三郎	城野久次郎	今井伊太郎	森井浅治郎
1931	上半期		土岐榮太郎	城野伊三郎			宮川之雄	戎野喜太郎	谷口豊三郎	城野久次郎	今井伊太郎	森井浅治郎
	下半期		土岐榮太郎	城野伊三郎			宮川之雄	戎野喜太郎	谷口豊三郎	城野久次郎	今井伊太郎	森井浅治郎
1932	上半期		土岐榮太郎	城野伊三郎			宮川之雄	戎野喜太郎	谷口豊三郎	城野久次郎	今井伊太郎	森井浅治郎
	下半期		土岐榮太郎	城野伊三郎			宮川之雄	戎野喜太郎	谷口豊三郎	城野久次郎	今井伊太郎	森井浅治郎
1933	上半期		土岐榮太郎	城野伊三郎			宮川之雄	戎野喜太郎	谷口豊三郎	城野久次郎	今井伊太郎	森井浅治郎
	下半期		土岐榮太郎	城野伊三郎				戎野喜太郎	谷口豊三郎		今井伊太郎	森井浅治郎
1934	上半期		土岐榮太郎	城野伊三郎				戎野喜太郎	谷口豊三郎		今井伊太郎	森井浅治郎
	下半期		土岐榮太郎	城野伊三郎				戎野喜太郎	谷口豊三郎	大門久三郎	今井伊太郎	平井晴雄
1935	上半期		土岐榮太郎	城野伊三郎				戎野喜太郎	谷口豊三郎	大門久三郎	今井伊太郎	平井晴雄
	下半期		土岐榮太郎	城野伊三郎				戎野喜太郎	谷口豊三郎	大門久三郎	今井伊太郎	平井晴雄
1936	上半期		土岐榮太郎			城野伊三郎	山口仲次郎	戎野喜太郎	谷口豊三郎	大門久三郎	今井伊太郎	平井晴雄
	下半期		土岐榮太郎			城野伊三郎	山口仲次郎	戎野喜太郎	谷口豊三郎	大門久三郎	今井伊太郎	平井晴雄
1937	上半期		土岐榮太郎			城野伊三郎	山口仲次郎	戎野喜太郎	谷口豊三郎	大門久三郎	今井伊太郎	平井晴雄
	下半期		土岐榮太郎			城野伊三郎	山口仲次郎	戎野喜太郎	谷口豊三郎	大門久三郎	今井伊太郎	平井晴雄

注）「−」は不明。
資料）吉見紡織株式会社『営業報告書』各期。

に奔走した。工場設立に反対する村会議員を説得し，自身の所有地に谷口綿布を設立させた。[(9)] 城野伊三郎は樽井村で紋羽業と地主経営を家業とする有力資産家で，樽井紡績設立で谷口房蔵の事業を後押しすることになったのである。[(10)]

表 4 は，吉見紡織の役員の変遷を示している。1919 年下半期の創業時のメンバーは，谷口房蔵や土岐榮太郎，宮川之雄そして今井伊太郎が主要役員として名を連ねている。1921 年下半期には，樽井紡績が合併されたため，その有力役員の城野伊三郎や戎野喜太郎，城野久次郎，森井茂吉が加わった。つまり，谷口綿布の創立に関わったメンバーが，その経営の存続に力を発揮したのである。

谷口綿布の設立には，谷口房蔵の事業戦略が生かされていた。谷口房蔵は，1907 年当時は，家業

(9)　今井末吉『「玉葱王」今井伊太郎翁伝』自費出版，1965 年，16–18 頁。
(10)　石井健詞編『大阪府行政百年史』新風土記出版，1978 年，675 頁。

の谷口商店で木綿卸売業を営みながら，大阪合同紡績の社長も兼務していた。一方で，谷口房蔵は，織布事業への進出を狙っていた。豊田式織機会社の社長に就任した谷口房蔵は，織布事業への進出の必要性を感じていたからである。そのため，谷口浦江織布工場を設立して織機の試験を実施した。つまり，この織機を実用化し，事業経営の多角化を実現するために，谷口綿布工場の設立を構想した。[11] そして谷口房蔵は，自身の木綿販売の流通網を基盤にして，吉見地域に大規模紡績を誕生させたのである。[12]

(4) 田尻村の振興と吉見紡織

吉見紡織の設立は，田尻村の周辺地域の工業化を急速に推し進めることになった。『大阪府泉南郡田尻村治績』には，谷口綿布が設立された 1907 年ごろの田尻村の状況が記されている。

「古來家庭工業トシテ白木綿ノ産額少カラサリシカ時勢ノ進運ニ伴ヒ機械工業之ニ代ハリ明治四十一年村内ノ機業家合同シテ資本金十萬圓ヲ以テ田尻織物株式會社ヲ創立シテ又大正三年資本金四百萬圓ノ吉見紡織株式會社設立セラレ爾來工場ノ設立相踵キ其ノ數大小二十一ニ及ヘリ（下線：筆者）[13]」と，当時の田尻村では，家内工業を生産単位として白木綿生産が営まれていた。しかし，吉見紡織や田尻織物株式会社（以下，田尻織物）の設立を契機として，工場の設立が相次ぎ地域で工業化が進むことになった。製品綿布についても，『大阪府泉南郡田尻村治績』では，「製品ノ主ナルモノハ紡績糸，天竺木綿，金巾，綾木綿，子ール地，毛織物，敷布，タオル等ニシテ[14]」と，天竺や金巾などの白生地綿布に加えて，綾木綿やネルや毛織物など多様な製品が産出されるようになった。

吉見紡織の設立は，田尻村の財政にも大きな影響を与えた。田尻村の税収は大きく上昇し，人口の増加を促すことにもなったからである。『吉見紡織株式會社工場現況』（1924 年 5 月）には，1914（大正 3）年度と 1922（大正 11）年度とで，田尻村の収支と人口の比較がなされている。これによれば，この期間で，村収入は 4,054 円から 66,277 円へと飛躍的に上昇し，村の収支は好転した（村の支出は，3,832 円から 48,913 円へ上昇）。田尻村の人口は，同期間で 1,931 人から 4,105 人へと増加し，住民の就業機会が広がった。『大阪府泉南郡田尻村治績』では，「大正三年吉見紡織株式會社ノ設置以來綿布製造ノ工場相踵キ其ノ數大小合シテ二十一個ヲ算スルニ至ルヤ從業者ノ他地方ヨリ移住スル者年々増加シ爲ニ往時純然一農村タリシモノ漸次住民ノ職業ニ變化ヲ來タシ今ヤ半農半商ノ村落タルニ至レリ（下線：筆者）[15]」と，吉見紡織の設立に伴う織布産業の興隆が移住の機会を増加させ，住民が商業を営むなど職業の多様化を促して，地域経済に変化をもたらしたのである。

---

(11)『谷口房蔵翁傳』谷口房蔵翁傳編纂委員会，1931 年，189–209 頁。
(12) 中沢米太郎『泉州産業史』岸和田市藤井町，1963 年，261 頁。
(13)『大阪府泉南郡田尻村治績』泉南郡田尻村，1921 年 2 月。
(14)『大阪府泉南郡田尻村治績』泉南郡田尻村，1921 年 2 月。
(15)『大阪府泉南郡田尻村治績』泉南郡田尻村，1921 年 2 月。

それだけでなく，谷口房蔵は，田尻村のインフラ整備にも積極的に関与した。1917 年に私財 2 万数千円を田尻村に寄付することで，田尻村の港湾施設の整備に貢献した。同様に，幹線道路の整備や吉見の里駅の誘致を行って，田尻村のインフラ環境を大きく改善させた。[16] 加えて，人口増加に応じて子どもへの教育環境を整えるべく，小学校も整備した。『大阪府泉南郡田尻村治績』には，「工場ノ増設擴張ニ伴ヒ學齢兒童増加セル等校舎狭隘ヲ告ケツヽアリシヲ以テ改築擴張ノ事ヲ計畫シ（下線：筆者）[17]」とあるように，小学校の整備にも谷口房蔵は資金援助で貢献したのである。[18]

紡織工場の設置やインフラ環境が整備された結果，田尻村の産業構造は大きく変化した。1914（大正 3）年度と 1922（大正 11）年度で，「農水産価額」が，89,026 円から 186,687 円へと増大する一方で，「工業其他生産価額」は，678,477 円から 8,292,019 円と目覚ましい増大をみせ，農業から工業へと産業構造が急激にシフトした。[19] 1927（昭和 2）年度に至っては，工産物総価格 8,205,445 円のうち，染織工業は 8,104,786 円と約 98.8％に達し，[20] 吉見紡織を始めとする繊維産業は，地域経済の中心に位置することになったのである。[21]

3　吉見紡織の経営分析

(1)　生産設備の拡大

吉見紡織は，紡績業界では中規模の紡績資本として創業した。『吉見紡織株式會社工場現況』によれば，1923 年度の吉見紡織は，紡績機 30,000 錘，撚糸機 5,000 錘，力織機 1,000 台を有したと記録されている。紡績機はイギリスプラット社製で，織機は豊田式織機會社製であった。次に，主力製品は細布（1 年の生産力は 50 万反）と朱子（1 年の生産力は 13 万反）で，原料綿糸はすべて自社製の綿糸が担った。なお，主要製品の細布の販路は，1922 年度の生産実績 48 万反のうち，インドが 42,000 反，朝鮮が 36,000 反，支那南洋その他へ 402,000 反が仕向け先となっていたことから，アジアが主力市場であった。[22]

それでは，吉見紡織の企業規模と設備拡張の推移を検討していく。1919 年下半期の紡績企業のランキングを示した表 5 によれば，当時の紡績企業 54 社のうち吉見紡織は 34 位の中規模にあたっ

---

(16)『谷口房蔵翁傳』谷口房蔵翁傳編纂委員会，1931 年，460–467 頁。
(17)『大阪府泉南郡田尻村治績』泉南郡田尻村，1921 年 2 月。
(18)『谷口房蔵翁傳』谷口房蔵翁傳編纂委員会，1931 年，460–467 頁。
(19)『吉見紡織株式會社 工場現況』（1924 年 5 月）。
(20)『役場廳舎建築梗概』大阪府泉南郡田尻村，1928 年 5 月。
(21) ただし，吉見紡織工場の用地獲得には田尻村民との軋轢も生じていた。同村の共同墓地を谷口房蔵に売却する際に，非常に安価で販売されたことが村内で問題視された。「田尻村にも紛擾 墓地賣却問題で」『南海公論』1920 年 4 月 15 日。
(22)『吉見紡織株式會社 工場現況』（1924 年 5 月）。

表 5　紡績企業のランキング（1919 年下半期）

順位	企業名	工場数	紡績機（錘数）			織機
			リング	ミュール	撚糸	（台）
1	大日本紡績	24	570,828	14,650	134,862	4,045
2	東洋紡績	27	530,976		36,968	12,902
3	鐘淵紡績	26	491,852		53,158	7,379
4	富士瓦斯紡績	6	292,688	30,280	69,532	1,753
5	**大阪合同紡績**	**10**	**230,116**		**36,696**	**1,599**
6	福島紡績	9	162,116			1,048
7	倉敷紡績	8	152,744		6,036	
8	岸和田紡績	7	143,560			540
9	日清紡績	3	89,880		28,756	664
10	和歌山紡織	8	59,944		6,600	1,090
11	日出紡織	2	48,152			
12	東京キャリコ製織	1	45,264			1,088
13	大分紡績	1	44,200		3,040	
14	近藤紡績所	1	40,452			1,048
15	長崎紡織	1	40,400			
16	明治紡績	3	33,632		6,600	317
17	内外棉	2	33,440		3,318	977
18	大阪織物	1	31,448		3,800	967
19	名古屋紡績	2	30,272			
20	相模紡績	1	30,192			
21	**豊田紡織**	**1**	**29,600**			**1,009**
22	佐賀紡績	1	23,952		3,600	408
23	天満織物	3	23,656			1,390
24	**和泉紡績**	**1**	**21,952**			
25	近江帆布	5	21,460		4,224	142
26	松岡紡織所	2	21,372			738
27	小津細糸紡績所	1	20,496		8,308	
28	山陽紡績	1	20,144		3,612	500
29	辻紡織所	3	14,208	7,400		588
30	紀陽織布	2	11,584			300
31	三島紡績所	1	11,484			
32	寺田紡績工廠	1	10,680			
33	浪速紡織	2	10,476			1,142
34	**吉見紡織**	**1**	**10,240**			**694**
35	大阪莫大小紡織	1	10,048			
36	関西紡績	1	8,676			
37	金澤紡績	1	8,400			
38	半田綿行	1	8,192			
39	内海紡織	1	6,648			590
40	日本紡織	1	5,840			
41	今治紡績	1	5,632			
42	松太綿布	2	5,576			530
43	海塚紡績所	1	5,192			
44	山本紡績所	1	3,884			
45	福山撚糸紡績	2	3,316		270	
46	服部商店	1	3,200			
47	東洋紡織	2	2,776		910	263
48	大津紡績	1	2,720		400	
49	四日市紡績	1	2,372			
50	鹿児島紡績	1				390
51	大福紡績	1				
52	東京紡績	1	紡機計画中			300
53	日本メリヤス	1	据付中			
54	帝國紡績	1	据付中			
54 件		191	3,435,932	52,330	410,690	44,401

資料）『綿糸紡績事情参考書』1919 年下半期。

ていた。同じく谷口房蔵が経営に強く関与した紡績資本をみると，まず大阪合同紡はリング精紡機230,116錘で5位，同じく豊田紡織は29,600錘で21位，和泉紡績は21,952錘で24位の上位にあった。谷口房蔵は，先述したように，織布事業への進出を重視していたため，大阪合同紡績は織機を1,599台，豊田紡織は1,009台を据え付けていた。この特徴を反映して吉見紡織は織機694台を有する紡織兼営となっていたのである。

吉見紡績の生産設備の変遷を表6から確認する。1919年下半期では，吉見紡織は紡績機10,240錘，そして大巾織機を浦江支店と吉見支店あわせて694台有する紡織経営織布であった。1921年下半期には，樽井紡績が合併された。

この合併によって，吉見紡織は，紡織設備ともに大きく拡大することになった。特に，吉見支店の設備拡張が進んでいく。1923年下半期に吉見支店の紡績機20,320錘，織機554台に加えて4,940錘の撚糸機が据え付けられた。昭和恐慌に直面した1929年下半期に紡績機は29,560錘と設備拡張が進み，1932年下半期に37,560錘，続いて1933年下半期は46,380錘で，そしてついに1935年には50,000錘を超えるまで規模を拡大した。その一方で，織機台数は，1930年以降減少を続けて，1932年下半期には姿を消した。その結果，紡績部門の強化がいっそう明確になった。一方，樽井支店は，紡績機が1926年上半期と1932年下半期にやや増錘がみられるものの，総じて規模拡大はみられなかった。それでは，吉見紡織の設備拡張は，どのようにして実現されていたのか。まずは資金調達の側面から検討していく。

(2) 資金調達

表7は，設備資金の調達状況を示したものである。まず固定資産をみると，増設勘定が期間を通じて継続的に計上されていることから，設備拡張を通じて企業経営を拡大させていたことがわかる。その設備拡張は，1920年代を通じて払込資本金や積立金，そして当期利益金などの自己資本が順調に増大することで支えられていた。特に1921年の樽井紡績の合併では，払込資本金の増額が有効に機能した。1921（大正10）年6月28日の株主総会にて，樽井紡績株式会社の合併が満場一致で可決された[23]。合併の資金は，1921年下半期の営業報告書に，「樽井紡績株式會社合併ニ依ル増資額金壹百萬圓ニ對スル新株式ノ払込金壹株ニ付金参拾七圓五拾錢宛合計金七拾五萬圓ハ大正拾年拾月九日合併契約ノ實行ニ依リ全部拂込ヲ了シタリ（下線：筆者）[24]」と記されたように，1921年下半期に払込資本金は3,250,000円へと75万円分が増資され（表7），合併資金が調達された。加えて借入金が，1920年下半期に589,000円計上されていることから，樽井紡績の合併資金の一部であったと考えられる。その後についても，1924年上半期に274,000円，1925年上半期に92,880円と断続的に計上

(23)『第拾六期營業報告書』吉見紡織株式会社，1921年下半期。
(24)『第拾六期營業報告書』吉見紡織株式会社，1921年下半期。

表 6　吉見紡織の設備拡張

年	期	浦江支店	吉見支店			樽井支店	
		大巾織機（台）	紡績機（錘）	撚糸機（錘）	大巾織機（台）	紡績機（錘）	大巾織機（台）
1919	上半期	–	–	–	–	–	–
	下半期	308	10,240		386		
1920	上半期	–	–	–	–	–	–
	下半期		10,240		386		
1921	上半期		10,240		386		
	下半期		10,240		386	10,240	
1922	上半期		10,240		386	10,240	393
	下半期		10,240		386	10,240	400
1923	上半期		10,240		386	10,240	400
	下半期		20,320	4,940	554	10,240	400
1924	上半期		20,320	4,940	582	10,240	400
	下半期		20,320	4,940	582	10,240	400
1925	上半期		20,320	4,940	624	10,240	400
	下半期		20,320	4,940	624	10,240	400
1926	上半期		20,320	4,940	624	10,704	400
	下半期		20,320	4,940	624	10,704	400
1927	上半期	–	–	–	–	–	–
	下半期		20,320	4,940	624	10,704	400
1928	上半期		20,320	4,940	624	10,704	400
	下半期		20,320	4,940	624	10,704	400
1929	上半期		20,320	4,940	624	10,704	400
	下半期		29,560	4,940	624	10,704	400
1930	上半期		29,560	4,940	624	10,704	400
	下半期		29,560	4,940	624	10,704	400
1931	上半期		29,560	4,940	408	10,704	400
	下半期		29,560	4,940	238	10,704	420
1932	上半期		29,560	4,940	238	10,704	420
	下半期		37,560	4,940		11,104	420
1933	上半期		37,560	4,940		11,104	420
	下半期		46,380	4,940		11,104	420
1934	上半期		46,380			11,104	420
	下半期		46,380			11,104	420
1935	上半期		51,420			11,104	420
	下半期		51,420			11,104	420
1936	上半期		51,420			11,104	420
	下半期		55,820			11,104	420
1937	上半期		51,580			11,104	420
	下半期		51,580			11,104	420

注 1）吉見支店は，1921 年下半期より本店となった。
注 2）「－」は不明。
資料）吉見紡織株式会社『営業報告書』各期。

表 7　吉見紡織の設備資金の調達

年	期	固定資産 (A)							自己資本 (B)	
			土地	建物	機械	工具什器	防火具	増設勘定		払込資本金
1919	上半期	–	–	–	–	–	–	–	–	–
	下半期	915,462	77,715	318,404	481,843	25,000	12,500		1,759,545	1,250,000
1920	上半期	–	–	–	–	–	–	–	–	–
	下半期	1,134,239	51,242	527,235	416,911	25,981	10,400	102,471	2,932,335	2,500,000
1921	上半期	1,195,058	52,653	634,309	431,383	33,039	27,337	16,336	2,817,839	2,500,000
	下半期	3,034,364	96,567	1,365,260	1,290,080	84,729	47,246	150,482	3,887,999	3,250,000
1922	上半期	3,364,432	96,567	1,444,516	1,492,825	82,607	47,195	200,722	3,950,771	3,250,000
	下半期	3,523,193	96,567	1,475,043	1,489,470	89,935	47,408	324,771	3,964,198	3,250,000
1923	上半期	3,713,387	96,567	1,472,624	1,465,393	88,760	46,227	543,816	4,037,722	3,250,000
	下半期	3,947,477	96,567	1,586,750	2,056,702	87,985	44,810	74,663	4,377,585	3,550,000
1924	上半期	4,051,255	96,567	1,611,252	2,107,094	149,926	45,516	40,900	4,645,011	3,750,000
	下半期	4,095,163	96,567	1,649,430	2,137,008	145,929	45,576	20,652	4,705,864	3,750,000
1925	上半期	4,053,953	96,567	1,669,898	2,087,264	149,955	46,634	3,635	5,292,202	4,250,000
	下半期	3,986,318	96,659	1,664,695	2,036,198	141,311	46,437	1,017	5,397,331	4,250,000
1926	上半期	3,901,135	99,771	1,630,639	1,988,306	135,609	45,937	872	5,454,714	4,250,000
	下半期	3,886,437	102,299	1,623,552	1,976,710	133,544	45,437	4,894	5,452,123	4,250,000
1927	上半期	–	–	–	–	–	–	–	–	–
	下半期	3,928,261	103,781	1,630,820	2,016,536	130,101	45,437	1,586	5,495,619	4,250,000
1928	上半期	3,904,055	103,731	1,620,820	2,005,430	124,639	44,988	4,447	5,525,123	4,250,000
	下半期	3,893,470	118,280	1,610,820	1,991,640	120,213	44,988	7,528	5,538,204	4,250,000
1929	上半期	4,117,990	121,810	1,603,820	1,985,599	119,656	44,388	242,719	5,473,790	4,250,000
	下半期	4,723,519	121,810	1,893,298	2,372,672	142,221	44,388	149,132	5,045,979	4,250,000
1930	上半期	4,822,612	121,810	1,917,086	2,527,921	162,706	62,914	30,175	4,667,561	4,250,000
	下半期	4,830,626	121,810	1,954,802	2,527,218	162,135	62,914	1,747	4,382,621	4,250,000
1931	上半期	4,781,513	122,154	1,936,853	2,502,640	152,251	62,914	4,701	4,420,368	4,250,000
	下半期	4,706,058	126,975	1,929,406	2,435,892	150,871	62,914		4,464,087	4,250,000
1932	上半期	4,678,234	128,655	1,905,014	2,349,015	140,669	59,914	94,967	4,515,380	4,250,000
	下半期	4,433,534	128,802	1,860,415	2,235,622	138,156	56,914	13,626	4,564,828	4,250,000
1933	上半期	4,298,269	128,322	1,822,988	1,992,082	128,718	52,414	173,745	4,634,874	4,250,000
	下半期	4,212,162	131,604	1,797,554	2,093,544	133,850	55,610		4,692,049	4,250,000
1934	上半期	3,983,994	131,604	1,768,318	1,902,240	116,192	50,610	15,030	4,846,482	4,250,000
	下半期	3,846,637	131,464	1,735,730	1,729,006	112,867	46,407	91,163	4,901,823	4,250,000
1935	上半期	3,780,621	131,464	1,683,483	1,800,959	120,262	43,407	1,047	4,939,773	4,250,000
	下半期	3,771,718	131,525	1,673,483	1,789,963	125,827	50,234	684	4,934,613	4,250,000
1936	上半期	3,740,922	131,525	1,671,882	1,759,503	123,999	50,234	3,778	4,860,657	4,250,000
	下半期	3,778,679	120,169	1,662,562	1,820,712	125,000	50,234		4,970,043	4,250,000
1937	上半期	3,249,916	101,943	1,426,634	1,555,136	120,969	45,234		4,373,924	3,500,000
	下半期	3,385,241	101,943	1,403,349	1,542,194	121,849	44,234	171,673	4,435,673	3,500,000

されていることから，設備拡張への一時的な資金の必要性に応えていたと考えられる。

しかし，昭和恐慌期の 1929 年下半期では当期利益金がマイナスに落ち込み，自己資本余裕金もマイナスを示すなど，吉見紡織の経営は不安定となった。この事態に対応するため，借入金が 1927

自己資本 (B)		自己資本余裕金	借入金	長期資金余裕金(E)	ROA	ROE
積立金	当期利益金(C)	(B)－(A)	(D)	(B)－(A)＋(D)	(%)	(%)
–	–	–	–	–	–	–
55,000	454,545	844,083		844,083	15.1	25.8
–	–	–	–	–	–	–
205,000	227,335	1,798,096	589,000	2,387,096	4.3	7.8
220,000	97,839	1,622,781		1,622,096	2.2	3.5
220,000	417,999	853,635		853,635	6.7	10.8
270,000	430,771	586,339		586,339	6.8	10.9
320,000	394,198	441,005		441,005	6.5	9.9
370,000	417,722	324,335		324,335	6.5	10.3
420,000	407,585	430,108		430,108	5.9	9.3
450,000	445,011	593,756	274,000	867,756	6.2	9.6
500,000	455,864	610,701		610,701	6.3	9.7
550,000	492,202	1,238,249	92,880	1,331,129	6.8	9.3
600,000	547,331	1,411,013		1,411,013	8.0	10.1
700,000	504,714	1,553,580		1,553,580	8.0	9.3
750,000	452,123	1,565,686		1,565,686	7.2	8.3
–	–	–	–	–	–	–
810,000	435,619	1,567,358	100,000	1,667,358	6.7	7.9
840,000	435,123	1,621,068	950,000	2,571,068	5.7	7.9
870,000	418,204	1,644,734	600,000	2,244,734	5.9	7.6
900,000	323,790	1,355,800	1,000,000	2,355,800	4.2	5.9
920,000	▲ 124,021	322,460	1,200,000	1,522,460	▲ 1.6	▲ 2.5
920,000	▲ 502,439	▲ 155,050	1,450,000	1,294,950	▲ 6.4	▲ 10.8
920,000	▲ 787,379	▲ 448,005	1,150,000	701,995	▲ 11.0	▲ 18.0
132,621	37,747	▲ 361,145	1,000,000	638,855	0.6	0.9
150,000	64,087	▲ 241,970	700,000	458,030	1.1	1.4
170,000	95,380	▲ 162,854	700,000	537,146	1.6	2.1
200,000	114,828	131,294	550,000	681,294	1.9	2.5
230,000	154,874	336,605	450,000	786,605	2.4	3.3
270,000	172,049	479,887	400,000	879,887	2.8	3.7
300,000	296,482	862,489	250,000	1,112,489	4.9	6.1
340,000	311,823	1,055,186	250,000	1,305,186	4.8	6.4
380,000	309,773	1,159,151	150,000	1,309,151	5.0	6.3
410,000	274,613	1,162,895		1,162,895	4.6	5.6
420,000	190,657	1,119,735	100,000	1,219,735	3.2	3.9
430,000	290,043	1,191,364		1,191,364	4.9	5.8
452,930	420,994	1,124,009	440,000	1,564,009	7.6	9.6
537,051	398,622	1,050,432	250,000	1,300,432	7.4	9.0

注 1）「積立金」は，「退職準備積立金」と「従業員保護資金」を含む。
注 2）「▲」はマイナス。
注 3）「ROA」は，総資産利益率。(C)÷(資産合計額)×100 で算出。
注 4）「ROE」は，自己資本利益率。(C)÷(B)×100 で算出。
資料） 吉見紡織株式会社『営業報告書』各期。

年下半期に 100,000 円，そして 1928 年上半期には 950,000 円，1930 年上半期には 1,450,000 円と増大の一途を辿った。つまり，借入金は，経営危機に伴う資金的な枯渇を補塡する役割を果たした。しかし，1931 年上半期からは当期利益金がプラスに転じ，自己資本金も 1932 年下半期からプラス

表 8　吉見紡織の主要株主の変遷

順位	1919 年　下半期					1921 年　下半期					
	名前	住所	株数			名前	住所	株数			
			旧株	新株	合計			旧株	第二新株	第三新株	合計
1	谷口房蔵	大阪	8,620	25,860	34,480	谷口房蔵	泉南郡	10,100	13,000	1,500	24,600
2	谷口豊三郎	大阪	410	1,040	1,450	土岐榮太郎	大阪市	4,780	11,880	1,855	18,515
3	池田馬之助	兵庫	100	300	400	宮川之雄	泉北郡	10,400	400	20	10,820
4	土岐榮太郎	大阪	100	300	400	土岐ハナ	大阪市	400	10,400		10,800
5	土岐ハナ	大阪	100	300	400	城野伊三郎	泉南郡	10,000		765	10,765
6	谷口エツ	大阪	100	300	400	谷口豊三郎	西成郡	1,680	1,680		3,360
7	宮川之雄	大阪	100	300	400	伊藤竹之助	大阪市			1,500	1,500
8	三谷軌秀	大阪	100	300	400	不破榮次郎	大阪市			1,500	1,500
9	今井伊太郎	大阪	100	100	200	戎野喜太郎	東京市			1,000	1,000
10	谷口敏夫	大阪	50	150	200	谷口エツ	西成郡	400	400		800
11	谷口英子	大阪	50	150	200	三谷軌秀	大阪市	400	400		800
12	大門久三郎	大阪	100		100	森井茂吉	泉南郡			750	750
13	奥三十郎	大阪		100	100	志方ノブ（志方合資会社）	大阪市			650	650
14	金田九平	大阪		50	50	城野久次郎	泉南郡			505	505
15	反保覺二郎	大阪		50	50	柿花仁右衛門	大阪市			500	500
16	奥金兵衛	大阪		50	50	田附政次郎	大阪市			500	500
17	原治三郎	大阪		50	50	今井伊太郎	泉南郡	200	200	40	440
18	原半作	大阪		50	50	谷口敏夫	西成郡	200	200		400
19	原伊八郎	大阪		50	50	谷口英子	西成郡	200	200		400
20	西阪平次郎	大阪		50	50	宇野亮一	泉南郡			400	400
小計	20 名		9,930	29,550	39,480	20 名		38,760	38,760	11,485	89,005
合計	41 名		10,000	30,000	40,000	426 名		40,000	40,000	19,990	99,990
シェア			99.3	98.5	98.7			96.9	96.9	57.5	89.0

注 1）保有株式の合計数に応じて，上位 20 名までランキングした。
注 2）1921 年下半期の 1 株当たりの価格は，「旧株」は 50 円，「第二新株」は 25 円 50 銭，「第三新株」は 37 円 50 銭。
注 3）1921 年下半期については，失権中の会社が有する「第三新株」の 10 株を除外している。そのため，株式合計は，本来の（↗）

を計上したため，吉見紡織は借入金への依存から脱却していった。

(3)　主要株主

吉見紡織の自己資本を支えた株主の動向を検討していく。表 8 で主要株主の変遷をみると，上位 20 名の株式の保有率が極めて高い。1919 年下半期では，98.7%で最も高く，1937 年下半期に至っても，85.9%を占めている。なかでも，谷口房蔵の株式所有額が 34,480 株で突出して高い。これは吉見紡織の設立だけでなく資金提供者としても極めて大きく貢献していたことを示している。1931 年上半期に至っても，谷口房蔵の息子の豊三郎が筆頭株主としての地位を堅持していた。創業から間もない 1919 年下半期では，主要役員の池田馬之助，土岐榮太郎，宮川之雄，そして今井伊太郎など谷口房蔵になじみが深い資産家が主要株主であった。加えて，大阪市在住の株主の影響力が大きい。つまり，吉見紡織は，今井伊太郎や城野伊三郎などの地元資産家の出資に加えて，大阪市の資産家の出資を組み合わせることで，紡績資本を経営することができたのであった。

1931 年　上半期					1937 年　下半期				
名前	住所	株数			名前	住所	株数		
		旧株	新株	合計			旧株	新株	合計
谷口豊三郎	泉南郡	21,780	26,180	47,960	谷口豊三郎	泉南郡	21,780	13,900	35,680
平井英子	兵庫県	10,200	5,200	15,400	平井英子	兵庫県	10,200	1,250	11,450
谷口敏夫	大阪市	4,940	7,770	12,710	谷口敏夫	泉北郡	4,940	4,650	9,590
土岐榮太郎	大阪市	400	2,370	2,770	土岐榮太郎	大阪市	400	2,175	2,575
伊藤忠合名会社	大阪市		1,500	1,500	豊商事株式会社	大阪市	500	780	1,280
戎野喜太郎	東京市		1,000	1,000	戎野喜太郎	東京市		1,000	1,000
土岐ハナ	大阪市	500	645	1,145	宮川正之	泉北郡	400	435	835
宮川之雄	泉北郡	400	435	835	城野伊三郎	泉南郡		820	820
城野伊三郎	泉南郡		815	815	上ノ山彌平	泉南郡	30	720	750
谷口エツ	泉南郡	400	400	800	谷口エツ	泉南郡	400	200	600
谷口佐太郎	泉南郡		635	635	城野久次郎	泉南郡		565	565
城野久次郎	泉南郡		565	565	田附政次郎	大阪市		500	500
若林源助	兵庫県		550	550	山口仲次郎	大阪市		500	500
田附政次郎	大阪市		500	500	上ノ山利一	泉南郡	100	360	460
森井浅治郎	泉南郡		500	500	平井晴雄	兵庫県		450	450
今井伊太郎	泉南郡	220	230	450	今井伊太郎	泉南郡	160	220	380
嘉納彌輿茂	泉南郡		350	350	嘉納彌輿茂	泉南郡		350	350
佐伯由太郎	泉南郡	80	250	330	佐伯由太郎	泉南郡	80	250	330
宇野亮一	岸和田市		300	300	播本秀治郎	泉南郡	60	230	290
宮本榮太郎	泉南郡	50	180	230	宮本榮太郎	泉南郡	50	230	280
20 名		38,970	50,375	89,345	20 名		39,100	29,585	68,685
407 名		40,000	60,000	100,000	366 名		40,000	40,000	80,000
		97.4	84.0	89.3			97.8	74.0	85.9

（↘）10 万株から 10 株減少している。
注 4）「シェア」は，上位 20 位株主の株式保有数の割合。単位は，%。
資料）吉見紡織株式会社『営業報告書』各期。

吉見紡織は，株主の出資を維持し，さらなる株式募集に応じてもらうために，高配当を行わねばならなかった。表 9 は，吉見紡織の当期利益金とその処分の内訳について，各期の推移を示したものである。これによれば，1919 年下半期の当期利益金の約 45 万円うち，約 69%の約 31 万円が配当金に充てられた。その後も，当期利益金の約 50%～約 60%が配当金となっていることから，吉見紡織は高配当を維持することで，株主の配当期待に応じていたと考えられる。しかし，経営が悪化した 1928 年上半期に配当金は 17 万円へと急減し，1929 年下半期以降になると，1930 年 1 月 19 日の『大阪朝日新聞』に「泉南郡田尻村では昨年下半期において吉見紡績工場が二十五萬圓の損を蒙り株主無配當となつた（下線：筆者）[25]」と報じられたように，当期利益金がマイナスになるに伴って無配となった。このため，株主からの資金調達は難しくなり，借入金への資金調達へとシフトしたと考えられる。なお，吉見紡織の欠損は，田尻村の財政に打撃を与えた。先の『大阪朝日新聞』は，

（25）「収入大減りで豫算大困り 泉南郡田尻村」『大阪朝日新聞』1930 年 1 月 19 日。

表 9　吉見紡織株式会社の利益金処分

年	期	当期利益金（A）	当期利益金の処分				配当率（%）	B÷A×100（%）
			積立金	株主配当（B）	従業員保護資金	後期繰越金		
1919	上半期	–	–	–	–	–	–	–
	下半期	454,545	50,000	312,500		92,045	50.0	69
1920	上半期	–	–	–	–	–	0.0	–
	下半期	227,335	15,000	120,800		91,535	10.0	53
1921	上半期	97,839				97,839	0.0	0
	下半期	417,999	50,000	260,000		177,999	16.0	62
1922	上半期	430,771	50,000	260,000		120,771	16.0	60
	下半期	394,198	50,000	195,000		149,198	12.0	49
1923	上半期	417,722	50,000	195,000		172,722	12.0	47
	下半期	407,585	30,000	213,000		164,585	12.0	52
1924	上半期	445,011	50,000	221,000		174,011	12.0	50
	下半期	455,864	50,000	225,000		180,864	12.0	49
1925	上半期	492,202	50,000	225,000		187,202	12.0	46
	下半期	547,331	100,000	255,000		192,331	12.0	47
1926	上半期	504,714	50,000	255,000		199,714	12.0	51
	下半期	452,123	30,000	255,000		167,123	12.0	56
1927	上半期	451,740	30,000	255,000		166,740	12.0	56
	下半期	435,619	30,000	255,000		150,619	12.0	59
1928	上半期	435,123	30,000	255,000		150,123	12.0	59
	下半期	418,204	30,000	255,000		133,204	12.0	61
1929	上半期	323,790	20,000	170,000		133,790	8.0	53
	下半期	▲ 124,021				▲ 124,021	0.0	0
1930	上半期	▲ 502,439				▲ 502,439	0.0	0
	下半期	▲ 787,379	▲ 787,379				0.0	0
1931	上半期	37,747	17,379			20,368	0.0	0
	下半期	64,087	20,000			44,087	0.0	0
1932	上半期	95,380	30,000			65,380	0.0	0
	下半期	114,828	30,000			84,828	0.0	0
1933	上半期	154,874	40,000			114,874	0.0	0
	下半期	172,049	30,000			142,049	0.0	0
1934	上半期	296,482	40,000	106,250		150,232	5.0	36
	下半期	311,823	40,000	106,250		165,573	5.0	34
1935	上半期	309,773	30,000	106,250		173,523	5.0	34
	下半期	274,613	10,000	85,000		179,613	0.0	31
1936	上半期	190,657	10,000			180,657	0.0	0
	下半期	290,043	20,000	85,000		185,043	0.0	29
1937	上半期	420,994	50,000	140,000	30,000	200,994	8.0	33
	下半期	398,622	30,000	140,000	20,000	208,622	8.0	35

注 1）小数第 1 位を四捨五入。ただし，「配当率」は小数第 2 位を四捨五入。
注 2）「▲」はマイナス。
注 3）1930 年下半期の積立金「▲ 787,379」は，損失金を積立金で処分したことを示す。
資料）『営業報告書』各期版，吉見紡織株式会社。

「同工場（＝吉見紡織：筆者）から徴収し得る営業収益税及び所得税約一萬千圓が全然とれなくなり，豫算高わづかに四萬二千圓程度の同村役場では大痛手で，五年度豫算編成について非常に困つてゐる，結局五年度豫算は右の徴税減収のため基本財産税入金六千圓，村営浴場積立金の千百圓，臨時部の土木費などを打切りまたは中止し，その他諸費一切を節減し總額三萬千圓程度で豫算を組み消極主義で切り抜けるほかないといつてゐる（下線：筆者）[26]」と記されたように，田尻村は吉見紡織からの税収減を受けて事業見直しや支出の削減などで対応せざるを得なくなった。

4　昭和恐慌と経営戦略の転換

(1)　吉見紡織の設備拡張

吉見紡織の設備拡張の計画についてまとめたのが表 10 である。これによれば，まず吉見工場では，1920 年代前半には，第 1 工場しか存在せず，1920 年下半期の増錘計画に基づいて設備拡張が進められた。あわせて，寄宿舎や女工娯楽所，独身社員合宿所など従業員の環境が整った。そして，1928 年下半期に，吉見村嘉祥寺に第 2 工場の設立が計画され，翌 1929 年の下半期に完成に至っている。このため，1932 年以降の吉見紡織の増錘は，第 1 工場と第 2 工場とが，ハイドラフト精紡機を導入しつつ進められることになった。一方，樽井支店は，紡績機や織機部門での増錘は計画されず，1929 年上半期に晒工場としての機械が据え付けられた。つまり，吉見工場が紡績機のハイドラフト化を進める一方で，樽井工場は晒部門の強化が図られたのである。

(2)　操業短縮と設備拡張

吉見紡織の一連の設備拡張は，紡績業界の操業短縮への対応が大きな影響力を与えた。表 10 の操業短縮関係の欄によれば，1920 年下半期に紡績業界は 4 割の操業短縮を実施していた。これは，第一次大戦後恐慌が綿糸布業界に混乱を招いたからであった。1920 年下半期の営業報告書には，「本期ニ入リテ斯界ハ益險悪トナリ機業界ノ不振ハ日ニ休業ノ數ヲ増シ各方面終ニ全休ノ姿ヲ呈シ紡績界ハ既約定品ノ解約操業短縮等恐慌的混亂ヲ生スルニ至レリ茲ニ於テ綿糸シンジケート團ハ組織セラレ既約定品モ各相當ノ値合切捨還元ニヨリ紡績業ノ四割操業短縮ノ實行等ノ種々ノ救濟方法ヲ盡シ（下線：筆者）[27]」と記されたように，第一次大戦後恐慌で綿業界は混乱し，綿糸布取引の解約や休業が深刻化した。このため，綿業界では紡績業の 4 割操短が実施されたのである。

この同時期に吉見紡織は，「前期中に起工シタル第貳號紡績工場及附属建物ノ増設工事ハ本期末ニ於テ全部竣成シ[28]」と，紡績工場と付属建物の増設工事を進めて生産力を高めただけでなく，「寄宿舎

(26)「収入大減りで豫算大困り 泉南郡田尻村」『大阪朝日新聞』1930 年 1 月 19 日。
(27)『第拾四期營業報告書』吉見紡織株式会社，1920 年下半期。
(28)『第拾四期營業報告書』吉見紡織株式会社，1920 年下半期。

表10　吉見紡織の設備拡張計画

年	期	紡織工場			操業短縮関係
		吉見工場		樽井工場	
		第 1 工場	第 2 工場		
1919	上半期				
	下半期				
1920	上半期	−	−	−	−
	下半期	紡績工場と付属建物の増設工事は竣成。寄宿舎事務所，女工娯楽室，独身社員合宿所の新築工事は終了。			紡績は4割操業短縮へ，価格下落。
1921	上半期				
	下半期			樽井紡績を合併。	操短解除へ。
1922	上半期				操短解除。職工事情で増産できず。
	下半期				
1923	上半期				
	下半期				
1924	上半期				
	下半期				
1925	上半期				
	下半期				
1926	上半期				
	下半期				
1927	上半期	−	−	−	−
	下半期				1割5分の操短・11月15日から8分の操短拡張へ。
1928	上半期				
	下半期		嘉祥寺に本社第2工場として紡機設置の計画。		
1929	上半期		本社第2工場は大部分を終え，機械据付へ。	樽井晒工場は大部分を終え，機械据付へ。	
	下半期		第2工場は完成。付属建物のうち，職工食堂，門衛所，用度品倉庫の建築に着手。	樽井晒工場は完成。	夜業撤廃と操短解除で増錘の流れ，供給超過へ。
1930	上半期		職工食堂，門衛所，用度品倉庫が完成。	操業開始。	2月15日から1割7分2厘の操短実施するが，価格惨落。操短拡張へ。
	下半期				操短拡張も効なく100円大台割れ。自由操短，9月再度の操短拡張。不安揺らいで期末には手堅き雰囲気。
1931	上半期				操短緩和決定で供給超過の懸念濃厚。
	下半期				操短緩和するも不安定。
1932	上半期		豊田式及びリーター式ハイドラフト精紡機8,400錘を増設。5月初旬から運転開始。		
	下半期	豊田式ハイドラフト精紡機8,820錘増設の計画。	ハイドラフト精紡機8,400台据付完了し運転開始。		
1933	上半期				
	下半期	豊田式ハイドラフト精紡機8,820錘の据付完了，運転開始。			
1934	上半期		豊田式ハイドラフト精紡績5,040錘増設の計画。捲返室1棟254坪を増築。		
	下半期		豊田式ハイドラフト精紡績5,040錘増設の11月中旬に据付完了，紡連の既定の封限以外は運転開始。		
1935	上半期				4–6月操短拡張，7，10月操短拡張。
	下半期				操短拡張へ。
1936	上半期				
	下半期				
1937	上半期	本社工場に精紡機 10,000 錘増設の計画。			
	下半期	精紡機 10,000 錘増設は，臨時資金調整法の許可を得て着手。			

資料）『営業報告書』各期版，吉見紡織株式会社。

表11　吉見紡織株式会社の生産状況

年	期	操業日数（日）		製布操出高（反）	原糸（梱）	晒製品（反）
		本社工場	樽井工場			
1928	上半期	157	157	314,728	8,496	
	下半期	158.5	158.5	267,656	7,445	
1929	上半期	157	157	299,064	7,923	
	下半期	165	165	241,066	7,842	
1930	上半期	162.5	162.5	188,801	8,960	13,810
	下半期	148	148	42,111	6,246	15,048
1931	上半期	148	148	70,047	7,429	11,516
	下半期	157	157	105,270	8,192	8,086
1932	上半期	153	153	125,754	8,858	17,283
	下半期	152	152	131,915	9,089	62,363
1933	上半期	156	156	129,695	10,045	10,180
	下半期	159	159	122,774	10,887	132,431
1934	上半期	158	158	132,698	12,343	69,127
	下半期	160	160	129,349	12,241	115,649
1935	上半期	156.5	156.5	119,951	12,440	192,134
	下半期	151.5	151.5	109,079	10,331	129,994
1936	上半期	151	151	112,709	10,650	129,398
	下半期	154	154	101,412	9,405	147,586
1937	上半期	151	151	104,501	10,993	193,075
	下半期	153	153	109,289	10,807	204,345

資料）『営業報告書』各期版，吉見紡織株式会社。

事務所女工娯樂室及獨身社員合宿所ノ新築工事ハ全部本期中ニ成功シタリ[29]」とあるように，寄宿舎や女工娯楽施設など職工の労働環境を整備して紡績の生産力の拡大と労働力の強化を進めていた。

続いて 1921 年下半期に，操業短縮が解除されると同時に樽井紡績を合併したことで，綿糸生産力はいっそう充実した。しかし，1922 年上半期の営業報告書には，「當期ニ入リ紡績ノ操短ハ解除セラレタルモ職工事情等ノ爲メ直チニ増産スルニ至ラス（下線：筆者）[30]」と，職工の確保が不十分であったため，計画的な増産が進まなかった。

昭和初期に相次いだ恐慌は，紡績業界全体にも大きな影響を与えた。1927 年の金融恐慌では，大日本紡績連合会は，綿糸布市場の不振を克服すべく，第 10 次操業短縮を実施した。しかし，その効果はみられなかった。吉見紡織の営業報告書に，「綿糸布相場ハ去ル五月以來壹割五分ノ操短ヲ実施セルニモ不拘休業銀行ノ整理遅延ニ祟ラレ商勢不振ヲ續ケ内外實需ノ梗塞ト綿製品ノ滯貨ト相俟テ更ニ市場ノ人氣ヲ壓シ相場ト米棉相場ハ勢ヒ漸落歩調ヲ辿ルノ止ムナキニ至レリ（下線：筆者）[31]」とあるように，操業短縮を実施したものの，市場の回復には至らなかった。さらに，「印度及ビ南洋方

（29）『第拾四期營業報告書』吉見紡織株式会社，1920 年下半期。
（30）『第拾七期營業報告書』吉見紡織株式会社，1922 年上半期。
（31）『第貳拾八期營業報告書』吉見紡織株式会社，1927 年下半期。

面ハ本邦綿糸布生産過剰ヲ見越シテ依然警戒ヲ持續シ斯クテ糸價ハ原棉ニ伴ハズ終ニ十一月十五日ヨリ更ニ操短拡張ヲ決議シ實施スルニ至リシモ其後米棉相場ノ反落ニ連レ買氣次第ニ減退シ商状再ビ不勢トナリテ就中綿布ノ如キ一層ノ採算不引合ニ悩マサレツヽ商内閑散裡ニ本期ヲ了レリ（下線：筆者）[32]」とあるように，市場の不振に対応して，いっそうの操短拡張を行ったものの，市場は依然として不振を極めていた。加えて，1928 年下半期の営業報告書に「製品市場ハ依然不況ノ域ヲ脱セズ對支問題ノ停頓ハ日貨排斥輸出梗塞等人氣ヲ阻害スルコト甚ダシク此間多少ノ一弛一張ハアレドモ殆ンド不振ヲ持續セリ（下線：筆者）[33]」と記されたように，中国での日貨排斥の問題も，業界の回復には大きな足かせとなった。この事態に対して吉見紡織は，1928 年下半期に，「當期ニ於テ田尻村大字嘉祥寺ニ本社第二工場トシテ紡機設置ノ計畫ヲナシ工場建築工事ノ契約ヲ了セリ[34]」とあるように，第 2 工場の新設を計画し，樽井工場は，1929 年上半期の営業報告書に，「當期初メ建築ニ着手セル本社第二工場及樽井支店晒工場ハ大部分工ヲ竣ヘ近々機械ノ据付ニ着手スル豫定ナリ[35]」と晒部門の強化を図ることとなった。

1929 年の紡績業界は，1929 年下半期に，「綿糸ハ深夜業撤廢ト共ニ操短解除サレ増錘ト供超懸念濃厚トナリ[36]」と記されたように，深夜業の撤廃と操業短縮の解除が重なって，紡績会社は増錘を進めていった。吉見紡織も，この業界の動向に応じるべく，設備拡張を進めたのである。1932 年上半期の営業報告書に，「本社第二工場ニ豊田式及リーター式ハイドラフト精紡機八千四百錘ヲ増設一部五月初旬ヨリ運轉開始セリ（下線：筆者）[37]」，そして 1933 年下半期には，「本社第一工場豊田式ハイドラフト精紡機八千八百二十錘ハ八月初旬全部据付ヲ完了シ運轉開始セリ（下線：筆者）[38]」，1934 年下半期には，「本社第二工場豊田式ハイドラフト精紡機五千四拾錘ハ十一月中旬全部据付ヲ完了シ紡績聯合會規定ニ依ル封緘ノ外ハ運轉ヲ開始セリ（下線：筆者）[39]」と，吉見紡織は，1930 年代にハイドラフト化をいっそう推し進めて，泉南産地で大規模な紡織兼営織布として成長したのである。

(3) 労働争議と織布部門の縮小

昭和恐慌は，吉見紡織の経営の悪化をいっそう深刻なものとした。表 7 によれば，1929 年下半期に 124,021 円の損益を計上し，1930 年上半期も 502,439 円の損益と経営はますます悪化した。そのため，吉見紡織は，労働賃金を見直さざるを得ず，1930 年 1 月 11 日から工賃の 1 割 2 分の引き下

(32)『第貳拾八期營業報告書』吉見紡織株式会社，1927 年下半期。
(33)『第参拾期營業報告書』吉見紡織株式会社，1928 年下半期。
(34)『第参拾期營業報告書』吉見紡織株式会社，1928 年下半期。
(35)『第参拾壹期營業報告書』吉見紡織株式会社，1929 年上半期。
(36)『第参拾貳期營業報告書』吉見紡織株式会社，1929 年下半期。
(37)『第参拾七期營業報告書』吉見紡織株式会社，1932 年上半期。
(38)『第四拾期營業報告書』吉見紡織株式会社，1933 年下半期。
(39)『第四拾貳期營業報告書』吉見紡織株式会社，1934 年下半期。

げを断行した。加えて，吉見紡織は，織機2部制を1部制に縮小し，織機台数を減少することで対応した。[40] これに対して，日本労働組合総同盟が1月16日からストライキで対抗した。[41] 1930年1月19日の『大阪朝日新聞』によれば，「既報－大阪府泉南郡田尻村吉見紡織のストライキは十八日（＝1月18日：筆者）朝に至り寄宿舎工，通勤工約百四十名が出勤織布部および紡績の一部など工場の約三分の一の機械の運轉を見た，残りの四百世（ママ）名の女工は依然罷業状態にあるが會社側はやゝ楽觀の體である，罷業團側では爭議を秩序立て工賃値下げ取消し，一年一回昇給その他の要求を同日夕方提出した（下線：筆者）[42]」とあるように，労働団体側は，工賃の値下げと賞与の昇給を要求した。しかし，ストライキの規模は一部に止まっていたため，吉見紡織は楽観的な姿勢を示した。この労働争議はいったんは解決し，吉見紡織は平常の操業を取り戻した。1930年1月22日の『大阪朝日新聞』には，「泉南郡田尻村吉見紡織工場の爭議解決後先番及び後番の交替を行ふことになり，その際の女工の動揺を慮られてゐたが，二十一日着手したところ至極平穏で欠勤勸女工は病気その他の事故によるもの十三名で爭議前の平日より好成績である（下線：筆者）[43]」と，むしろ労働者の生産性が良好になるという状況になった。

しかし，不況が深刻化するにつれて，吉見紡織はやはり賃下げと職工解雇を進めた。[44] 1930年4月15日の『大阪朝日新聞』には，「泉南郡田尻村の吉見紡織工場は不況を理由として十五日付で男工八名を解雇した。解雇手當は最高百五十圓，最低十圓で目下のところ不穏の形勢はない[45]」と記された。続いて，同年4月22日の『朝日新聞』が，「泉南郡田尻村の吉見紡績工場では十五日付八名の職工を馘首し，引つづいて不況その他の理由で十三餘の男工を馘首し，樽井分工場でも二十一日までに二十名を馘首，計四十名となつた，職工連の間には今のところ動揺はないが，二十一日本工場に外部から宣傳ビラを撒いたものがあるので佐野署で警戒中（下線：筆者）[46]」と記しているように，吉見紡織の職工の解雇は樽井工場を含めて増加し始めた。これに対して吉見紡織の職工間では動揺はなかったものの，同地域の田尻織物などで労働運動が高まっていたため，この地域の警察署が警戒を強めることになった。

吉見紡織は，さらに賃金の切り下げを実行した。1930年5月20日の『大阪朝日新聞』によれば，「泉南郡田尻村吉見紡織では二十一日から機械部紡織部の職工約八十名の賃金一割値下を行ふことを発表した（下線：筆者）[47]」と，機械部と紡織部の職工の賃金は1割切り下げとなった。1930年の6月

---

(40)『田尻町史』783–785頁。
(41)『田尻町史』779–780頁。
(42)「四百名の女工は依然と罷業」『大阪朝日新聞』1930年1月19日。
(43)「女工の交替は平日より靜か 爭議後の吉見紡」『大阪朝日新聞』1930年1月22日。
(44)『田尻町史』781–782頁。
(45)「吉見工場で職工を解雇」『大阪朝日新聞』1930年4月19日。
(46)「宣傳ビラ撒布 職工解雇した吉見工場へ」『大阪朝日新聞』1930年4月22日。
(47)「吉見紡績 賃銀一割下げ」『大阪朝日新聞』1930年5月20日。

に入っても，吉見紡織の職工解雇と賃金切り下げは続いた。6 月 1 日の『大阪朝日新聞』は，「泉南郡田尻村吉見紡織では不況のため最近各職場にわたり部分的に男女七十餘名を解雇し，二十六日から三十一日にかけて今度は特に織機部に限り日に二，三名づゝ計十八名餘の男女工を解雇し，三十一日はさらに五十名を解雇する計畫を重役間でたてゝゐるといふ噂が生じたゝめ，織機部の工手四百餘名は會社が織機部を閉鎖するのではないかと戦々兢々してゐる（下線：筆者）[48]」と，特に織機部での解雇が続いたため，吉見紡織が織布部門を閉鎖するのではないかという懸念が職工の間で共有されることになった。これに対して，吉見紡織側は否定的な見解をとった。「右に對し同社人事課では語る 「今後は知らぬが，三十一日に五十名を解雇したということは全然ない，また（職工部を：筆者）閉鎖するといふが如きこともあり得ません」（下線：筆者）[49]」と，吉見紡織の人事課は，織機部の閉鎖を明確に否定した。ところが，その数日後の 6 月 10 日には，吉見紡織は，織機部の縮小を樽井工場で実行した。1930 年 6 月 12 日『大阪朝日新聞』には，「泉南郡田尻村に本工場を有する同郡樽井村吉見工場分工場では去る五日本工場が断行したのに倣ひ十日から織機二部制を一部制に縮小，同時に織機四十台餘を減じた，これに伴ふ解雇者は工手約二百名のうち百名が昨年末から契約延期，結婚その他の原因で退職したゝめ今回新たに解雇者を出すには至らない（下線：筆者）[50]」と報じられた。つまり，吉見紡織は織機部の縮小は行ったものの，職工の新たな解雇はないという見通しも示すことで事態の収束を図ったのである。

1930 年 8 月になると，吉見紡織が職工の解雇を進めたため，地元の佐野警察署が事態を問題視することになった。8 月 22 日の『大阪朝日新聞』には，「泉南郡田尻村吉見紡織株式會社では財界不況から極度の経営難に陥り本年三月以降なし崩し的に職工を解雇してゐたが，六月ごろから一時止み，最近に至り重役と面會し，警察に秘密にして解雇されると今後問題が起こった場合困ると警告したが舊労働黨田邊納，山田亮之助兩氏はこの問題について二十二日工場長に面會し解雇の理由をただし嚴重抗議することになった（下線：筆者）[51]」という。同紙によれば，吉見紡織は，1930 年 1 月には約 1,000 人の職工を使用していたものの，この時期には 400 人近く減少していたという。警察側は，吉見紡織が労働者の解雇や賃金切り下げという対応策について明確に示すように求めたのである。この背景には，当時の職工解雇が泉南産地全体の問題となっていたことがあった。8 月 24 日の『大阪朝日新聞』では，「工場地帯をなしてゐる泉南郡の農業では多く子女を工場に通勤させ農業のみを専業としてゐるものは稀で，全國農業組合に加入してゐる農民は同郷に七百餘名あり，組合最近の調査によると機業不況のため工場から追い出されたものが五百二十五名のおびたゞしい數にのぼつてゐる，この實情から推して郡一般農民の工場失業者は恐らく一萬餘に達してゐるだろうと

（48）「解雇の噂に戦く職工 會社側では否認 泉南郡吉見紡織工場」『大阪朝日新聞』1930 年 6 月 1 日。
（49）「解雇の噂に戦く職工 會社側では否認 泉南郡吉見紡織工場」『大阪朝日新聞』1930 年 6 月 1 日。
（50）「織機部二部制を一部に縮小 樽井の吉見紡」『大阪朝日新聞』1930 年 6 月 12 日。
（51）「吉見紡織で極秘裡に解雇 辻佐野署長警告を發す」『大阪朝日新聞』1930 年 8 月 22 日。

觀測されてゐる（下線：筆者）[52]」とあるように，泉南郡の労働者は農家出身であるものの，失業者は10,000人を超える規模に達していた。それゆえ，泉州労働組合の代表者や全国農民組合大阪府聯合會の委員長が吉見紡織へ改善を求めるという事態にもなった[53]。これに対して吉見紡織の回答は，「全部を解雇したのでなくこのうち大半は任意郷里に歸つたもので解雇手當も十分出してゐます今後織機部はなほ縮小する方針ですから斷じて無茶なことはしないつもりです（下線：筆者）[54]」と，職工の解雇が職工自身の意思であることと，解雇手当は十分支給したことを伝えた。加えて，織機部の縮小を明確に打ち出した。この吉見紡織の方針を受けて，8月25日に辻警察署長は吉見紡織の重役に直接その意向を確認した。『大阪朝日新聞』には，「不穏當な解雇をさけ解雇する場合には相當の解雇手當を支給し出來る限りは犠牲者を出すことなく他に方法を講ずるやう具體的對策について進言協議を重ねた[55]」と，辻署長は，職工の解雇の減少とその手当の充実についての説明を吉見紡織から受けた。その結果，8月27日には「辻署長が二十七日官舎で労使と個別的に會見折衝の結果，解雇手當等も圓満に運び解決した[56]」と，吉見紡織での労働争議は決着した。その結果，吉見紡織は，労働問題を一応の決着とし，織布部門を縮小して紡績部門の拡張を重視していくことになった。吉見工場は，最新のリング精紡機の拡張が進み，産地への原料供給の役割を強めていく。そして樽井工場は，晒製品を強化することで，産地に付加価値綿布を生み出すことになった。つまり泉南の白生地綿布との差別化を進めると同時に，産地の製品の多様性を高めることにつながったのである。

5　おわりに——産地形成と谷口房蔵

1929年に谷口房蔵がその生涯を終え，その翌年に大阪合同紡績は東洋紡績に合併された。しかし，吉見紡織は，経営難を迎えたものの独立企業として存続し，泉南産地に拠点を置き続けた。そしてそのつながりは，泉南産地においては織布業の成長と連動するものでもあった。本稿は，谷口房蔵と彼が経営を担った吉見紡織に焦点をあてて，地域の紡織兼営資本の展開を明らかにしてきた。その結論を，綿織物産地の形成と連動させつつ3点を述べたい。

1つ目は，泉南産地の形成に関わる点である。泉南産地は，単純な白生地綿布を少品種大量生産するという性格が特徴的とされ，そのなかで「産地大経営」が生まれてくるとされてきた。本稿は，

---

(52)「職工解雇問題で工場主を監視 泉州労働組合代表者ら先ず吉見紡に反省を促す」『大阪朝日新聞』1930年8月24日。

(53)「職工解雇問題で工場主を監視 泉州労働組合代表者ら先ず吉見紡に反省を促す」『大阪朝日新聞』1930年8月24日。

(54)「吉見紡織で極秘裡に解雇 辻佐野署長警告を發す」『大阪朝日新聞』1930年8月22日。

(55)「不穏當な解雇はなるべく避けよ 辻佐野署長から再び吉見紡織に注意」『大阪朝日新聞』1930年8月26日。

(56)「吉見紡事件解決」『大阪朝日新聞』1930年8月30日。

泉南産地では多様な製品が各地域で展開しており，その企業規模についても，大小さまざまな形態を有していたことと，その多様性が泉南産地の競争力になっていたことを強調した。

吉見紡織は，操業短縮や深夜業廃止，労働争議などを経て，ハイドラフトを導入した最新紡績工場へと経営戦略をシフトしていった。そして，産地の紡織兼営織布として産地機業家への原料綿糸の供給の役割を担い，樽井工場で晒製品という高付加価値の製品を創出することで，泉南産地の発展に貢献していたのである。

2 点目は，谷口房蔵が，泉南綿業に果たした役割について述べたい。「綿の王」と呼ばれた谷口房蔵は，日本綿業界を代表する経営者であった。まずは，泉南綿業にとって，岸和田紡績と対抗する「一極」としての役割を果たした。大阪財界で名声を有していた谷口房蔵は，地域の資産家を結集する象徴としての役割を期待された。寺田紡系の紡績企業（岸和田紡・寺田紡）と谷口系の紡績企業（吉見紡織・和泉紡）とが並立することで，産地は多様性を増して，泉南産地の急成長を牽引することにつながった。産地は原料綿糸の供給の役割を担う地元紡績資本が複数となることで，産地機業家の綿糸調達はいっそう円滑になったからである。加えて，吉見紡織は，ハイドラフト精紡機という最新紡機を積極的に導入していたから，その製品綿糸は泉南産地の競争力をいっそう強めたのである。

3 点目は，綿業資本と地域振興の側面である。泉南地域に吉見紡織という大規模な紡績資本が生まれた要因は，地域の資産家からの出資が大きな原動力であった。特に，谷口綿布の創業や吉見紡織の設備拡張には，地域資産家の株式投資が主要な役割を果たした。この資金は農産品の玉ねぎを先駆的に開発した今井伊太郎や，紋羽業や地主経営などで活躍した城野伊三郎の貢献が大きかった。これは，近世以来続いた在来型の織物業からの工業化を泉南の綿業に促した。そして田尻町の財政を好転させてインフラ整備を促し，農家婦女子の就業機会を創出することで地域振興につながったのである。

〔謝辞〕本稿の作成には，井上正行氏，城野伊一郎氏，中村正明氏，畑中加代子氏から，資料収集および閲覧で大変お世話になった。記して謝意を表したい。

参　考　文　献

論文・書籍（articles & books）

阿部武司（1989）『日本における産地綿織物業の展開』東京大学出版会 [Abe, Takeshi, *Nihon ni okeru Sanchi Men-orimonogyo no Tenkai*, Tokyo Daigaku Shuppankai, 1989]

阿部武司・平野恭平（2013）『繊維産業』日本経営史研究会 [Abe, Takeshi & Hirano, Kyohei, *Sen'i Sangyo*, Nihon Keieishi Kenkyukai, 2013]

石井健詞編（1978）『大阪府行政百年史』新風土記出版 [Ishii, Kenji ed., *Osakafu Gyosei Hyakunen-shi*, Shin Fudoki Shuppan, 1978]

中沢米太郎（1963）『泉州産業史——明治・大正時代』岸和田市藤井町 [Nakazawa, Yonetaro, *Sensyu Sangyo-*

shi: Meiji, Taisho Jidai, Kishiwadashi Fujiicho, 1963]
橋口勝利（2017）『近代日本の地域工業化と下請制』京都大学学術出版会 [Hashiguchi, Katsutoshi, *Kindai Nihon no Chiiki Kogyoka to Shitaukesei,* Kyoto Daigaku Gakujutsu Shuppankai, 2017]

資料等（materials）

今井末吉（1965）『「玉葱王」今井伊太郎翁伝』自家出版 [Imai, Suekichi, *'Tamanegio' Imai Itaro-o Den*, Jika Shuppan, 1965]
『営業報告書』吉見紡織株式会社,（各年度）[*Eigyo Hokoku-sho*, Yoshimi Boshoku Kabushiki Gaisha, (Kaku Nendo)]
『大阪朝日新聞』1930 年 [*Osaka Asahi Shinbun*, 1930]
『大阪府泉南郡田尻村治績』泉南郡田尻村，1921 年 [*Osakafu Sennangun Tajirimura Chiseki*, Sennangun Tajirimura, 1921]
『田尻町史 歴史編』田尻町史編纂委員会, 2006 年 [*Tajiricho-shi Rekishi-hen*, Tajiricho-shi Hensan Iinkai,1931]
『谷口房蔵翁傳』谷口房蔵翁傳編纂委員会，1931 年 [*Taniguchi Fusazo-o Den*, Taniguchi Fusazo-o Den Hensan Iinkai, 1931]
『役場廳舎建築梗概』大阪府泉南郡田尻村，1928 年 [*Yakuba Kyusha Kenchiku Kogai*, Osakafu Sennangun Tajirimura, 1928]
『吉見紡織株式會社 工場現況』吉見紡織株式会社，1924 年 [*Yoshimi Boshoku Kabushiki Gaisha Kojo Genkyo*, Yoshimi Boshoku Kabusiki Gaisha, 1924]

要旨: 本稿の課題は，近代日本の綿織物産地の形成過程を解明することである。

谷口房蔵は，地域の有力な資産家の出資を集めて，郷土の泉南産地に，大規模な紡織兼営織布の吉見紡織株式会社を設立した。このことで，田尻町の財政を好転させ，インフラ整備に貢献した。吉見紡織は，昭和恐慌や労働争議などを迎えた際には，織布部門の縮小とハイドラフト化を推し進めて競争力を強化した。そして原料綿糸を産地機業家へ供給した。この結果，産地の競争力を高めて，成長へとつながっていったのである。

キーワード: 繊維産業，工業化，カルテル，労働争議